

通し番号	4520
------	------

分類番号	22-7B-21-24
------	-------------

(成果情報名) 産卵、産肉能力の高い国産鶏の作出 (平成21年え付け鶏の組合せ検定の成績)
[要約] 卵肉兼用の国産鶏の2つの組合せについて、産卵・産肉能力を産卵用外国鶏と比較すると、1つの組合せは産卵能力が優れ、もう1つの組合せは産肉能力が優れている。
(実施機関・部名) 神奈川県農業技術センター畜産技術所 連絡先 046-238-4056

[背景・ねらい]

現在、産卵鶏の種鶏のほとんどが海外で保有されており、食料の安定供給の観点から、平成22年に策定された家畜改良増殖目標のなかで国産鶏の改良増殖が重要な課題となっている。そこで、(独)家畜改良センターや他県と連携して、産卵能力と併せて産肉能力も高い卵肉兼用という特長を持った国産鶏を作出して県内農家へ普及する。

[成果の内容・特徴]

- 1 外国鶏(ボリスブラウン)を対照として、国産鶏の系統間交雑種であるYA×LA(産卵系)、XS×YA(岡崎おうはん)について、0~64週齢まで産卵性、卵質、産肉性を調査する。
- 2 産卵性では、YA×LAは産卵率が最も高く($P<0.05$)、XS×YAは平均卵重が最も軽い($P<0.05$)。日産卵量、飼料要求率はYA×LA、外国鶏、XS×YAの順に優れている($P<0.05$) (表1)。
- 3 卵質では、XS×YAは外国鶏より卵殻厚が薄く($P<0.05$)、YA×LAより卵殻強度が弱く($P<0.05$)、また、卵黄色が外国鶏より濃く($P<0.05$)、卵黄重比が最も大きい($P<0.05$) (表1)。
- 4 産肉性では、XS×YAは50、64週齢時の正肉重が重く($P<0.05$)、正肉歩留まりが大きい($P<0.05$) (表1)。

[成果の活用面・留意点]

平成20年10月に発足した岡崎おうはん振興協議会を通じて、XS×YAは「岡崎おうはん」として民間種鶏場から商業用雛が既に販売されている。YA×LAは近年の産卵成績が良好であり、将来的には「岡崎おうはん」と同様に普及される可能性がある。

今回の試験鶏はいずれも卵肉兼用種であることから、産卵性と併せて産肉性についても改良を進めていく必要がある。

[具体的データ]

表1 産卵・産肉成績等（0～64週齢）

項目	ボリス 外国鶏	YA×LA 産卵系	XS×YA 岡崎おうはん 卵重系
[育成期（0～20週齢）]			
0～19週齢：			
育成率（%）	98.8 b	93.5 ab	88.8 a
飼料総摂取量（g/羽）	8346 a	8442 a	8946 b
20週齢体重（g）	1649 a	1671 a	1898 b
50%産卵到達日齢	142 ab	139 a	147 b
[成鶏期（20～64週齢）]			
・産卵性			
産卵率（%）	87.7 a	91.2 b	86.7 a
平均卵重（g）	61.5 b	61.5 b	58.8 a
日産卵量（g）	54.1 b	58.1 c	51.1 a
飼料摂取量（g/日）	109.2	109.8	109.0
飼料要求率	2.03 b	1.96 a	2.15 c
生存率（%）	96.7	95.8	97.5
・卵質（36、64週齢時）			
ハウユニット	84.7	81.9	81.0
卵殻強度（kg）	4.03 ab	4.12 b	3.70 a
卵殻厚（mm）	0.38 b	0.36 ab	0.35 a
卵殻重（g）	5.96 b	5.78 b	5.44 a
卵殻重比（%）	9.46	9.22	9.09
卵黄色	13.10 a	13.36 ab	13.72 b
卵黄重（g）	15.97	16.30	16.64
卵黄重比（%）	25.29 a	25.99 a	27.74 b
血斑出現率（%）	2.00	0.00	0.00
肉斑出現率（%）	20.00	22.00	32.00
・と体検査			
（50週齢時）			
生体重（g）	2150 a	2153 a	2410 b
と体重（g）	1950 ab	1915 a	2185 b
と体重歩留まり（%）	90.7	88.9	90.7
正肉重（g）	805 a	803 a	952 b
正肉歩留まり（%）	37.4 a	37.3 a	39.5 b
（64週齢時）			
生体重（g）	2063	2069	2356
と体重（g）	1867	1860	2167
と体重歩留まり（%）	90.3	90.0	92.0
正肉重（g）	759 a	779 ab	963 b
正肉歩留まり（%）	36.7 a	37.7 a	41.0 b

※同一項目内において異符号間に有意差あり（P<0.05）

[資料名] 平成22年度試験研究成績書

[研究課題名] 生産性の高い国産鶏の作出

[研究期間] 平成21～22年度

[研究者担当名] 平原敏史